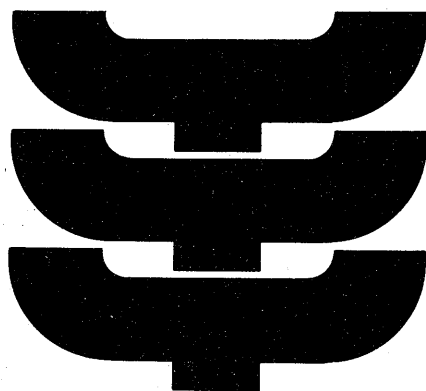


大野城市の文化財

＜ 第 四 集 ＞
大野城特集号



大 野 城 市 教 育 委 員 会

目 次

序	1
大野山	2
大 野 城	4
大野城跡内影	6
空からみた大野城跡	8
大野城跡略図	10
指定物件写真	12～19
国指定特別史跡「大野城」について	20
大野を詠んだ万葉のころ	22
あ と が き	24

序

千数百年の歴史の重みがそこここに散在する筑紫路は、万葉の歌人や防人たちのロマンをも秘めて、今もなお私たちに「何か」を語りかけてくる。

古くは、農業や窯業の中心地であったろう「大野」も、長い激動の歴史の流れをへて、今や「都市化」の渦中にある。

村から町へ……

そしていま、町から市へ。

4月1日から「大野城市」となった本市の、一連の文化財史料第4集は、記念すべき「大野城特集号」としてお届けしたい。

この史料によって「大野城」に対する関心と、理解を深めていただければ幸いである。

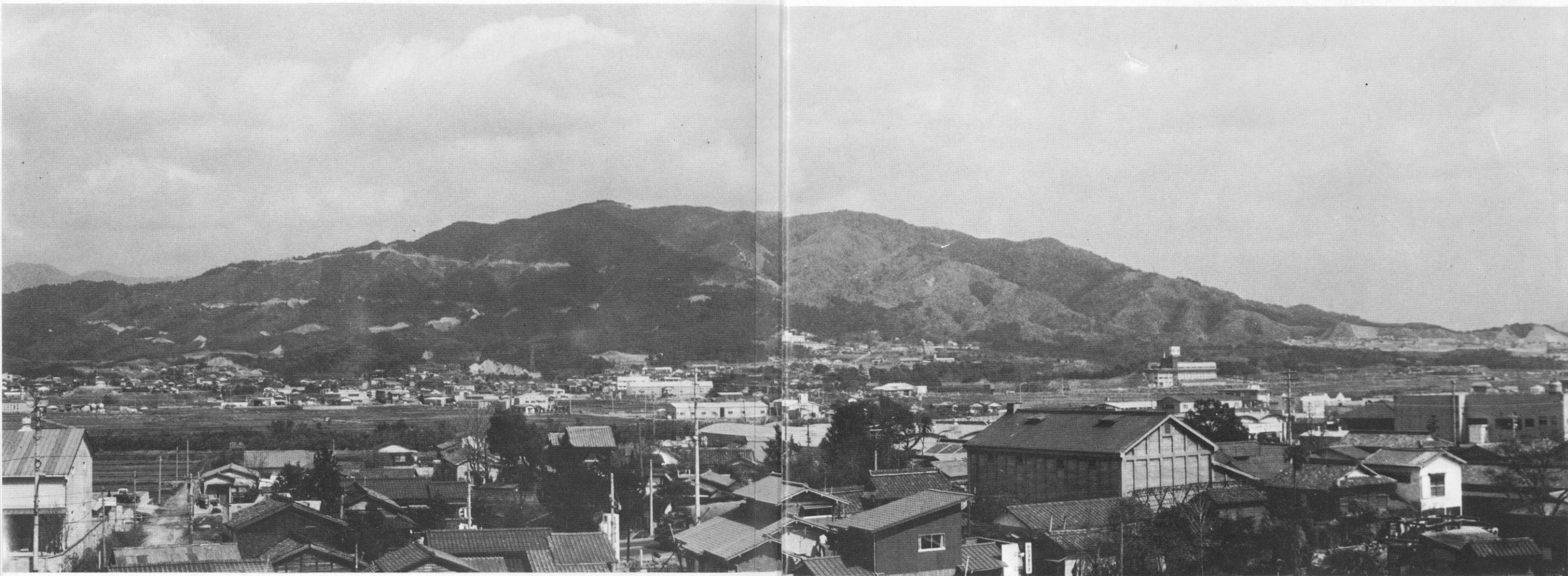
昭和47年3月

大野城市教育委員会

教 育 長 阿 部 哲 郎

大 野 山

(別名四王子山・御笠山)



(大野小学校屋上から撮影)

大 野 城

福岡県文化財専門委員 筑 紫 豊

筑紫路の大野、その大野の東に、四季それぞれの粧いをみせて、姿よろしく横たわっている山を、`大野山、と呼び親しむようになったのは、いつのころからであつたろうか。それは古きに過ぎて、今ではそれを知るすべがない。しかし、天智天皇4年(西暦665)に、この大野山の頂きの全域にわたって、百済様式の城が築かれて、その名を`大野城、と書き、オオノノキと呼ぶことになったいきさつは、わが国最古の正史である『日本書記』に書き誌されている。

わが国は、物語としては神功皇后以来、史実としては、今を去る1,600年ほど前、4世紀の後半から、中国へ使を遣わす大事な通路としての百済(今の大韓民国の西側)と交渉をもつようになった。ところが、天智天皇の母帝斉明天皇6年(西暦660)、百済の隣国である新羅は、中国の大唐と連合してこの百済を滅してしまった。そこで、その翌年、斉明天皇は68才の老令の身ながらも皇太子以下の皇族・藤原鎌足以下の重臣を従えて筑紫に下ってきて、百済再興のことに当たろうとしたのであったが、不幸にして朝倉の行宮に病没した。母帝の意志をついだ天智天皇は、なお筑紫にとどまって遠征の軍を指揮したのであったが、天皇の2年、百済の白村江(今の錦江)の戦いで、わが水軍は唐と新羅の連合軍に大敗し、残余の軍隊や要人たちは急ぎわが国に撤退しなければならぬ破目になった。そして、それまで、筑紫地方の政治・経済と、軍事・外交とを司どっていた`筑紫大宰、(今の三宅のあたりにあった)も、海辺に近すぎて非常に備えるのに適しないという事態になった。

天智天皇は、難局に処するため、敗戦の翌年には、対馬・壱岐・筑紫地方に、東国地方の壮丁およそ3,000人を動員し、`防人、(さきもり)として配置し、島々や崎々や山々には烽火台(すずみ)を設けて、その防人をして、敵襲その他の緊急連絡に当らせた。そして、筑紫大宰を要害の地に移して、軍事的に強化する一方、外交方針の転換をはかることになった。その要害を固めるための第一着手となったものが、大野城出現の前年に築かれた`水城、であった。

この水城も百済様式の防塁であるからして、その築堤の指導をしたのは、当然に百済からの亡命將軍であつたと思われるが、『日本書紀』には「筑紫に大堤を作り水を貯えしむ。名づけて水城という。」とのみ記されていて、指導者の姓名は見えていない。朝廷は、大野の奥、要害の地に水城を築きおわると、ついでその翌年には大野・椽(基山)の二城を築いたのであった。書紀には、百済の亡命將軍の達率憶礼福留たつそつおくらいふくろと同四比福夫しひふくふとがその指導に当つ

たことが明記されている。達率というのは、百済の貴族の第二等にあたる身分をいうのである。この二人が一緒になって二つの城を造ったのか、それぞれに分担したのかは不明であるが、とにかく、このようにして、大野城は出現した。まさに、いまを去る1307年前のことである。このような筑紫路の三城は、対外的国防を目的とするわが国最古のものであって、その規模の大きい点、その意義の重要な点で、他に比類がない。今日、この三つの城跡いずれもが、特別史跡に指定されて、その保護に格別の措置がとられつつあるのは当然のことといえる。

大野城は、いうまでもなく山城であるが、その最高所にあたる毘沙門が410メートルの標高となっている。山頂は宇美町へ下る道の方を開口として、本市および太宰府町の側はずっと一連の頂きが馬蹄形をなしていて、その頂きに土塁線があり、水門があり、頂きをめぐらした山内に諸施設があった。毘沙門に立って西北方を望めば、玄界洋・博多湾から大野にかけての海陸にわたるわが郷土は指呼のあいだに展開しているのである。

このような大野城内に、四王寺が設けられて、四天王(持国天・増長天・広目天・毘沙門天)を祀り、常時僧侶をして仏典を読ませ、その仏陀の加護によって、さらに外敵防護の力を加えることにしたのは、奈良時代も終りの宝亀6年(西暦775)のことであった。大野山の別称として「四王寺」の山名が生じたわけはこのようなことからであった。

とまれ、筑紫路の外交・軍事・政治・経済の中心である太宰府は、このようにして完成した要害内に移転し、三宅時代とは面目を一新して、基地における朝廷の一大出先機関として整備され、奈良時代になると、「天下の一都会」として、都城の繁栄を見るにいたったのであるが、その文学的な象徴ともいえるべき万葉集筑紫歌壇を形成した有名無名の歌人たちが遺した歌のなかにも、わが大野城のある大野山を、あるいはまた、城の山・大城の山として詠んだものがある。それらの歌どもを掲げて、この小稿を閉じることにしよう。

大野山霧立ちわたるわが嘆く息嘯の風に霧立ちわたる (山上憶良)

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ (大伴百代)

今もかも大城の山にほととぎす鳴きとよむらむ吾なけれども (大伴坂上郎女)

いちしろく時雨の雨は降らなくに大城の山は色づきにけり (詠人未詳)

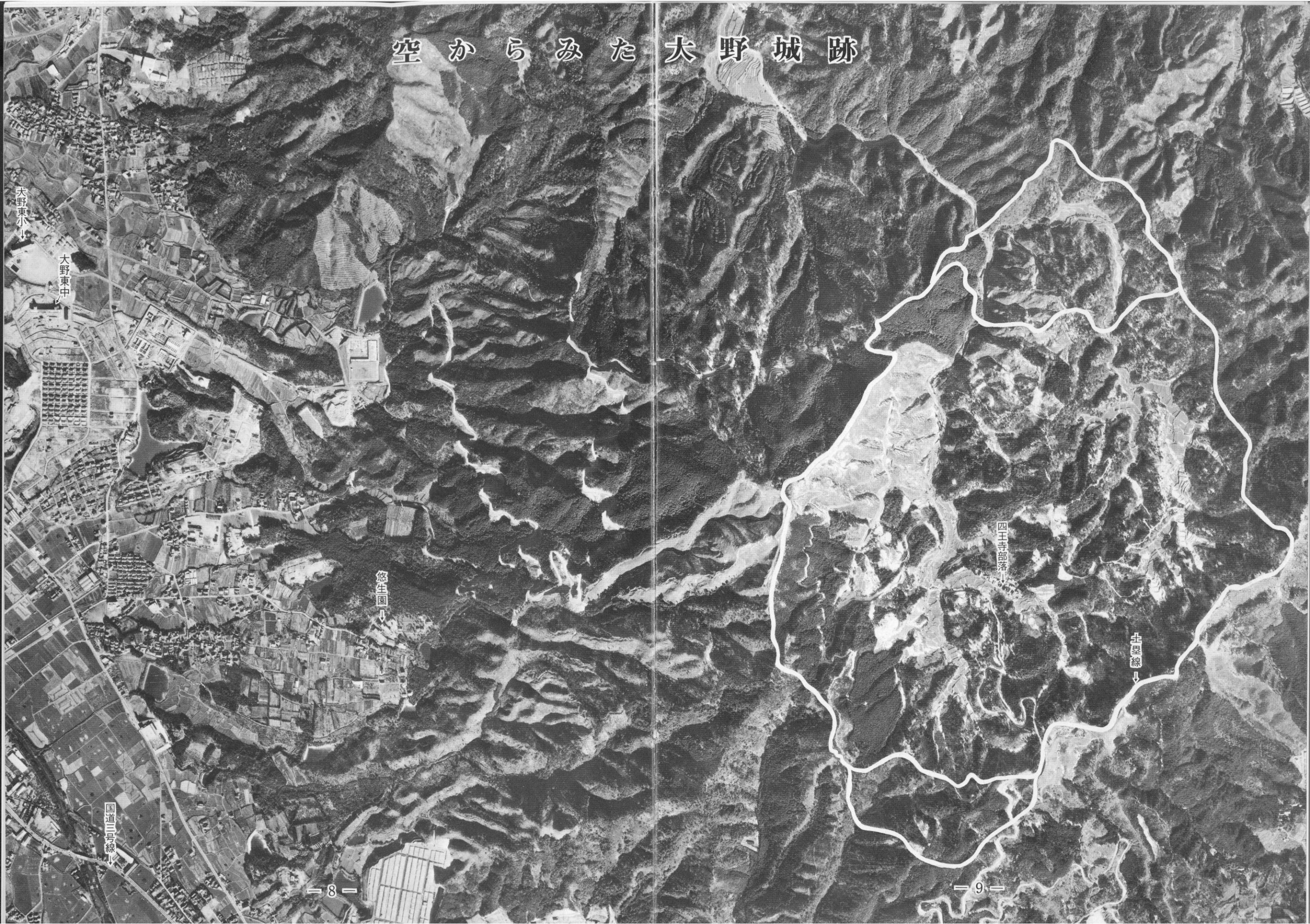
国土防衛施設としての大野城跡は、このような文学的の詠嘆とともに、朝夕に仰ぎ見られて、永久に本市民の史感を豊かなものにすることであろう。そして、そこに、本市の他市に誇りうる郷土的特殊性があると思う。

遠見所跡から望む 大 野 城 跡 内 影



(四王子部落と毘沙門天跡…右上方は粕屋郡)

跡城野大 みたから空



大野東小

大野東中

悠生園

四王寺部落

土壘線

国道三号線

大 野 城 跡 略 図

宇 美 町



…国指定のうち…

番号	遺 跡 名 称	ペ ー ジ	撮 影 場 所
1	百 間 石 垣	12	
2	大 石 垣	12	
3	小 石 垣	13	
4	土 壘	13	増 長 天 跡
5	水 城 口 門 礎 石	14	
6	太 宰 府 口 門	15	
7	ケ イ サ シ の 井 戸	16	
8	鐘 ケ 池	16	
9	倉 庫 礎 石 跡	17	
10	持 国 天 跡	18	遠 見 所
11	増 長 天 跡	18	
12	広 目 天 跡	19	
13	毘 沙 門 天 跡 (多 聞 天)	19	

大
野
城
市

⑬
四王寺山頂

③
主城原礎石跡

四王寺部落

○ 遠見所

太宰府へ

太 宰 府 町



石 壘 ： 百 間 石 垣



石 壘 ： 大 石 垣



石 壘：小 石 垣



土 壘



水 城 口 門 礎 石



水 城 口 門 礎 石



太宰府口門



太宰府口門石垣



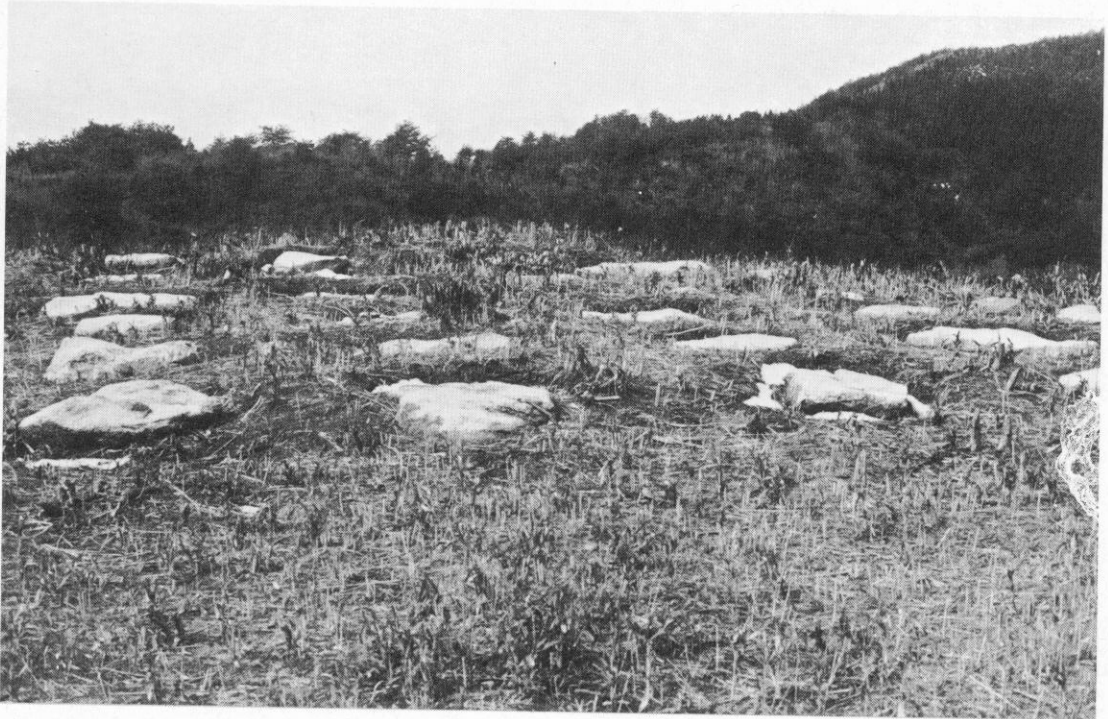
ケ イ サ シ の 井 戸



鏡 ケ 地



礎 石 跡



礎 石 跡



持 国 天



増 長 天



天 目 広



天 聞 多 (または 毘沙門天)

国指定特別史跡「大野城」について

福岡県教育庁文化課調査係長 藤井 功

大野山 霧立ちわたる わがなげく

おきその風に 霧立ちわたる

この歌は万葉の歌人山上憶良がうたったものですが、この「大野山」は大野城市の東に今も変らぬその姿をみることができます。

この山に日本最古の城「大野城」が築かれたのは、今から約1,300年も前のことです。

ここに城を築いたのは、勿論、太宰府を本来あった海岸の地から現在地に移そうとしたころから始まります。

この間の事情は、朝鮮半島の情勢の変化に対応したものだといわれています。

すなわち、この頃の半島は、統一をめざす新羅と、日本の援助によって復興をはかろうとする百済とが対峙し、新羅・唐（中国）の連合軍と百済・日本軍が最終的に撃突するのが白村江の戦いで、この戦いに手痛い敗戦をした天智天皇が帰国後、新羅にそなえて九州支配の中心部であり、日本の外交と防衛の拠点である太宰府を内陸に後退させ、そのかためとして水城の大堤とともに築城されたのが大野城です。665年（天智天皇4年）のことと日本書紀にあります。

しかも、このとき築城を指揮したのは、百済の人で「憶礼福留」「四比福夫」の両人と記録にあります。したがって城のつくりは、いわゆる朝鮮式の山城で、今日我々が考えるような日本の戦国時代の城とは全く性格の異なるものです。ここでも古代における海外との技術面での文化交流の一つの側面を大野城にみることができます。

新羅や百済の山城がそうであるように、大野城も、中央の盆地をとり囲むように山の陵線に土塁をきずき、いくつかの谷をとりこみ、土塁が谷を横断する部分では石塁になっている。土塁を一周するとほぼ5km、現在でも土塁をはっきりと確認することができます。土塁は、太宰府側と、宇美町側で、それぞれ二重に回され、現在下から通路上に五ヶ所の城門が知られております。一つは、太宰府口の旧道で最初の土塁のところにある。谷を石塁で渡り、石塁と片側の自然の峯との間には敷石と礎石があり、その礎石には、柱座と扉の軸受けの穴も残っているので、城門の跡であるそとがはっきりします。

宇美町から四王寺に通ずる道は現在拡巾されているが、途中道の両側に見えるのが百間石垣です。特に道の西側の石垣は、百間石垣の名の様にうねうねと続き、毘沙門から続く土塁に接続する。ここ

にも城門と恐らく水門があったろうと推定されます。川の中から発見された二箇の門の礎石は現在宇美八幡宮に保存されています。

太宰府町坂本から上る谷にそった道にも大石垣がある。谷の両側のかかなり高い部分から石を積み、谷をふさいである。水門等の遺構ははっきりしない。しかし東側と西側の石塁が一直線にならないで、道巾分だけ食いちがうところから恐らくここにも門があったろうと考えられます。

この谷のすぐ西の尾根道がいわゆる坂本口で、現在一箇の門の礎石があります。

二重になっている外側の土塁はこの位置を通っていないので、この門は、土塁線からかなり下った位置にあることになります。

最後に水城口、ここは、広目天の峯から水城の大堤に通ずる道で、土塁線上にきれいな門礎が現位置を保っています。

中の盆地には二つの谷が入り、ここに水田が発達し谷頭に四王寺の部落があります。恐らく当初から城内で農耕を行い自給自足の体制をとっていたものと思われます。

城内の建物も、礎石をもった立派なもので大きさもほぼ似たものが多く、太宰府口の頂上部と中央にのびる主城ケ原といわれる尾根にほぼ集中しております。現在棟数にして35棟の建物の存在が知られています。

これ等の建物は倉庫的な役割もかなりあったとみえ、その附近から炭化米等が出土することも知られております。

又、石塁等の多くは谷の水を一部せき止め飲料に使う意味をもったと思われますが、井戸の存在も知られております。

これまであまり注意されていないことですが城としての機能を考えた場合、海岸側に対してかなりの注意を払っているもので、麓から山頂土塁に達するそれぞれの尾根に道路とともにかなり細かい手をほどこしていることがわかってきました。とすると大野城のこれからの保存は、単に頂上部のみでなく、山腹をふくめどこまで現状を維持できるかにかかってくるわけです。

最後に現在大野山は、「四王寺山」と呼びならされておりますが、これは、奈良時代の終りに、新羅に対抗するために山頂に四天王をまつたために、これから四王寺山と呼ばれるようになったもので、平安時代に入りますと、城としての役割は全く失ってしまい、お寺を中心とした信仰の対象の山として経筒等の埋納が盛んに行われ、今日まで周辺の人達にとって最も身近かな山として親しまれてきたのであります。

「大野」を詠んだ万葉のころ

福岡県教育庁指導主事 笠 文 七

○大野山霧立ちわたるわが嘆くおきその風に霧立ちわたる (巻5・799)

(大野山に霧が立ちわたっている。わたしの嘆息する息の風で霧が立ちわたっている)

筑前の国守山上憶良が、太宰府の帥(長官)大伴旅人に贈った歌だといわれます。

大伴旅人は屈指の名門大伴氏の氏の長者で、おおらかな上流貴族でした。「咲く花の匂ふが如く今盛り」の奈良の都をあとにして、はるばる九州太宰府に、その長官として赴任をしたものの、まもなく最愛の妻大伴郎女をなくしたのでした。

(こうもまあ、わが妻のみまかるとの早きを知っていたならば、日本の国の名所の数々を残らず見物させてやるであつたのに——。ああ残念なことよ、悔しい限りよ。)

——悔しかもかく知らませば青丹よし国内ことごと見せましものを—— (797)

(生前、妻が、見ては楽しみ心の慰めにしていたセンダンの花。 奈良の都の旧居にも大きなこの木は栄えていたが——。妻は、ここ、つくしの国太宰府の家の庭前に咲くセンダンの花に、華やかな奈良の都をしのぶよすがとしていたのであつたろう、その花の盛りに、おそらくは奈良の旧居をゆめ見ながら息を引き取ったと思われるが——。わたしの流す涙がまだ乾かないというのに、もはやセンダンの花は散ってしまうであろうよ。)

——妹が見し棟の花は散りぬべし我が泣く涙いまだ干なくに—— (798)

こうして、明け暮れ亡き妻をしのび、涙にくれる64歳の老長官大伴旅人であつたのです。ひとしお涙もろさを加えたこの老歌人、旅人の傷心を慰めて贈った歌というのが冒頭の一首なのです。山上憶良69歳の作です。

大野山の山並みから蒙々と立ち上がる霧を国府のやかたから眺めた憶良は、これこそ、長官旅人の奥方の死を悼み、長官旅人の傷心を悼んでの、わが嘆く嘆きのため息なのだと、切実な感情を象徴的に歌い上げたものです。贈られた旅人、そして贈った憶良、ともに老境の詩人の胸中はどうであつたでありましょうか。

○今もかも大城の山にほととぎす鳴きとよむらむわれなけれども (巻8・1474)

これは、任満ちてつくしの国から奈良の都へ帰った大伴坂上郎女が、大城山(大野山)をなつかしみ、そして、そこに鳴くほととぎすをなつかしんで作った歌です。

わたしがつくしの国に住んでいたころ——。四月が来るか来ないかという晩春初夏のころから五月六月と、奈良の都を恋い慕うわたしの郷愁をさらにさらにとかきたてるように鳴いてくれていたあの山ほととぎす。わたしは今、奈良の都に帰っているが、さて、あの山ほととぎすはやっぱりあの大野山で鳴きたてていることでしょうか。と、つくしの国、大野の山を思いやり、なつかしむ万葉人の心情をそのままに歌った作品です。

○いちしろく時雨の雨は零らなくに大野の山は色づきにけり (巻10・2197)

しぐれが木の葉を紅葉させるとよくいわれるが——。つたが、かえでが、はぜが、柿が、まあ、いつのまにこんなに色づいたのでしょう。この大野の山に、目に立つほど、それほどまでに時雨は降らなかったのに。

だいたいこのような意味に解していいのではないのでしょうか。山青ければ青きがよし。紅葉すればさらにまたよし。自然の移り変わりに興を抱き、朝夕に大野山を眺める万葉の歌人の姿が想像される作品です。

○梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ (巻5・823)

天平二年(730年)正月15日、大伴旅人卿の屋敷では梅花の宴が開かれました。主人旅人や山上憶良、少弐小野老ら地元の歌人はもちろん、南は薩摩、大隈から北は壱岐対馬からと、合わせてその数32名。主人大伴旅人は、帥(長官)としての任期も満了に近く、やがては都奈良に帰れようという年の正月(旧暦)のことです。いわば旅人にとっては九州歌壇の人々とのお別れ新年宴会というような気持ちもあったことでしょう。

32名の一流歌人たちは「梅の花」という題で、次々と歌をよみました。万葉集の巻5には、815から846まで、32人分32首が並んでいます、その中から何首かを拾ってみましょう。

○春さればまず咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日暮さむ (山上憶良)

春になれば第一に咲くわが家の梅の花を、ひとり見ながら春の日を暮らすことであろうか。

○梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにはけらずや (小弐粟田大夫)

梅の花の咲いている園の青柳は、頭の飾りのかづらにするほどになったのではないか。

○梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林にうぐひす鳴くも (少監阿氏奥島)

梅の花の散るのを惜しんで、この園の竹林にうぐいすが鳴くよ。

○わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れくるかも (大伴旅人)

わが園に梅の花が散る。それとも天から雪が流れてくるのであろうか。

いかがでしょうか。梅の花は今を盛りに咲きほこり、柳も芽ぶいている。植えこみの竹林からはうぐいすの声も聞こえてくる。春の光は歌人たちに暖かく、さしかわす盃にもゆらいでいる——。のどかな、暖かな——。ところがどうでしょう……………

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ と歌った大伴百代の歌は——。

梅の花が散っているんですって、まあ、それどこにですか、柳が芽をふいているんですって、ほんと？竹の園でうぐいすが鳴いているんですって、とんでもない。それ、そこの大野山をごらんないな、まだ雪が降っているじゃありませんか……………

ほかの人々の作品が多分に想像の翼を広げた作品であろうと思われるのに、この大伴百代は何という率直な、かけねなしの歌を作ったものなのでしょう。いくら旧暦だといっても、正月の15日なのです。現在の2月中旬ごろの太宰府の寒さや、雪、梅の花の状況をよくごぞんじの大野城市の皆さんには、大伴百代のこのうたに『すがすがしい』共感を覚えられないのではないのでしょうか。

[参考資料]

- | | |
|-----------------|-------|
| ○日本国民文学全集 一万葉集一 | 土屋 文明 |
| ○九州の万葉 | 福田良輔他 |
| ○九州万葉散歩 | 筑紫 豊 |

..... あ と が き

「特集号」という、平面的な内容をアピール
することは、たいへんむずかしいものです。

それだけに、レイアウトを、いま少し研究す
る必要があった……と反省しています。

史情あふれる、この「大野城」をご高覧の上
何かとご教示ください。 (S.1)

※表紙カットは、文化財愛護のシンボルマークです

昭 和 47 年 3 月 発 行

大 野 城 市 教 育 委 員 会